

な か ま

発行
佐倉市立中央公民館
なかま編集係

〒285-0025
佐倉市鍋木町 198-3
電話 (043) 485-1801

2 ページ	ボヴァリー夫人の児戯	村田長保	そば談議	宮武孝吉
3 ページ	母の教え	山崎衛良	名アナウンサー	宮本定雄

佐倉七牧

なな まき

金井義彰

江戸時代、下総地方には、幕府直轄の広大な牧が二つあった。小金牧と佐倉牧である。放し飼いにする野生の馬を野馬というが、この野馬の牧で、佐倉牧の面積は約一万町歩とする資料があり、現在の佐倉市の面積にほぼ等しい。

ところで、千葉県北部の、西は小金、松戸の周辺から東は香取、山武へかけて利根川以南の下総台地一帯の放牧地は、千葉氏支配の時代以来、漠然と千葉野と呼ばれていた。

堀田正盛が松本から佐倉へ所替えとなり、佐倉城主になった寛永十九年から正保期にかけて西半分を小金野、東半分を佐倉野とし、小金野には牧が五つ、佐倉野には七つあったところから小金五牧、佐倉七牧と呼ぶようになった。

ここで、佐倉野の佐倉は、中世の佐倉から命名したもので近

世の佐倉城下の佐倉ではない。佐倉七牧といっても、現在の佐倉市域には、この牧のいずれも含まれていない。

將軍吉宗の時代になると、七牧のうち柳沢、高野、内野の三牧は佐倉城主に預けられ、残りの小間子、取香、矢作、油田の四牧は小金在住の野馬奉行の管理下におかれたが、牧場の實際の管理者は、牧士といわれる人々であった。

牧士は、地方の有力農民のなかから選抜され、牧の仕事に携わっているときは武士の身分となり苗字帯刀を許され乗馬も認められていた。牧の周辺には野馬土手が築かれていて、毎年、野馬捕りが行われた。周辺の村々は牧の野付け村として協力させられたが、『成田参詣記』にこの様子を描いた絵がある。野馬は幕末、小金牧に約千三百頭、佐倉牧に約三千八百頭いた

という。

小金牧と佐倉牧を併せて下総牧ともいっていたが、徳川幕府崩壊で廃止され、新政府の殖産事業として開墾会社が設立され入植者によって開墾が始められた。それにもない、佐倉七牧は、小間子・柳沢牧が八街村、高野牧が十倉村、内野牧が七栄村、矢作牧が十余三村、油田牧が九美上村になった。

取香牧だけが開墾から外され、ここに七牧の野馬が集められ、ここに七牧の野馬が集められ後に下総御料牧場になるが、牧場総面積の六割を帝室林野局に移管後、三里塚を中心に集約され、三里塚の御料牧場として親しまれてきた。

御料牧場には三万本の桜が植えられ、花の名所になったが、成田空港建設にともない惜しくも約百年におよぶ歴史に幕を閉じ、昭和四十四年、栃木県高根沢町に移転した。

いまは、牧場の跡地の一部は公園にして保存され、牧場事務所があったところは記念館になっている。

(編集委員)

ボヴァリー夫人の兎戯

彼女は時にデッサンの筆をとった。そのそばにじつと立っているのは、シャルルに比べてえらく楽しみなことだった。エンマが画用紙の上にかがみこみ、自分の作品を見るためにまばたきをしたり、拇指でパンの中身を丸めてかたまりをこしらえたりしているのを眺めるのは。(杉 捷夫 訳)

彼女はときどきデッサンを描いた。シャルルはじつとそばに立って、絵をよく見ようと目をしばたいたり、パンの中身を拇指で丸めたりしながら、エンマが紙ばさみのうえにかがんで描いているのを見物した。それがシャルルには非常な楽しみであった。(伊吹武彦訳)

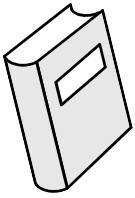
同じ『ボヴァリー夫人』だが、二つの邦訳は微妙に異つ

ている。

「まばたき」をしたり「拇指でパンの中身を丸めたり」するのはどちらなのか。それより、何故ここで「パンの中身を丸める」などという兎戯にも等しい行為が出てくるのか、是非「注」が欲しい所だ。

つまりパンの中身を丸めるのは、木炭やチヨークを消すための消しゴム代わりだったという事実を知る必要がある。消しゴムは一七七〇年J・ブリーストリーによって発明されたばかりで、当時はまだかなり高価だった。だからデッサンにはパンが必需品だったのだ。となれば、パンを丸めるのはエンマということになる。(他に四種の邦訳を調べたが、いずれもパン「消しゴムに言及したものは無かつた。)

(新白井田 村田長保)



そば談議

讃岐出身なのでうどん大好き人間だが、今日はそばの話をする。峠を越えると阿波の国、という阿讃山脈あさんの山村で育った。田はほとんどなく、村人は山の斜面の畑でそばを栽培していた。

町から伯父が祖父との囲碁を楽しみに、町に住んでいる祖母の姉妹が連れ立って湯治に、寺なので行事で説教をお願いした坊さんが、などなど、泊まりがけで来る客人の多い家であったが、山のもてなしはそばである。

そばのゆで玉をお椀に入れて、大根や人參、揚げ等を刻んで煮た汁をかける。ただそれだけだが、これがうまい。町の人にはご馳走である。

給仕をするのが子どもの役目であった。お盆を持って正座して控える。三杯目になると客がためらう。そこをすかさず「どうぞ」と勧めるのが

給仕役の心得であった。

長じて、上京した私がたまに帰郷すると祖母が「孝吉が帰ってきた」とそばを打ってご馳走してくれた。

これは嬉しかった。新聞紙を敷いて石臼を置く。そばを挽くのは手伝うが、あとは祖母の領域である。とても、おいしかった。

ところで、うどんは長く、そばは短い、というのが祖母や母が教えてくれた私の常識であった。しかし上京して初めてこちらのそばを食べた時は驚いた。そばがうどんと同じように長いからである。

違和感があったが、異議は唱えないことにした。藪、更科、砂場に代表される江戸は、そばの本場だからである。

すぐにこちらのそばにも慣れて、現役時代昼食は職場近くのそば屋さんに日参した。しかし、するする、ではなく、しゃぶしゃぶと食べるあの、田舎そばが、懐かしい。

(上志津原 宮武孝吉)

母の教え

母が亡くなって五十四年、月日の経つのは早いものである。

しかし子供の頃、母に教えられたことは今でも鮮明に覚えており業務や生活に役立ってきた。ありがたいことである。

母は子供に「最低限の生きる術を付与する」と考えていたよう、年齢によって仕事を課せられた。小学四年になると針仕事、例えば簡単なボタン付け、下着の繕い。小学五年になると男女共に「ご飯の支度の手伝いである。鏝の付いた鉄釜、鉄鍋、竈で薪を燃やしてご飯とみそ汁を作る。時には南瓜、里芋等も煮た。母から「ご飯を炊き馬鈴薯を具にしたみそ汁」を作るよう言われた。母は「ご飯が焦げようが生煮えだろうが食べるから一人でやりなさい」と言つて米を渡した。米を研ぐま

ではできたが水加減が分からない。母に聞いても誰かに聞けというだけ。姉に聞くと「踝まで入れ、初めトロトロ中パツパだよ」と教えてくれた。ご飯は少し焦げたが何とか食べられた。問題はみそ汁である。馬鈴薯の皮はどうにか剥いたが、どの位に切れれば良いか分からない。母に聞くと「毎日食べていても分からないか」と叱られた。これも姉に聞き解決。うどん打ちは切るのに苦労したが茹でて食べられた。針仕事、洗濯も同様であつた。

大学では寮に入ったが物がない時代、お腹が空けば夜、ご飯を炊いて皆で食べたが、炊けた。靴下の穴繕り、洗濯もできた。

子供達には大学入学と同時にアパートで自炊をさせた。ある時息子に古米はサラダ油を垂らして炊くと美味しくなると教えられた。

(井野 山崎衛良)

名アナウンサー

NHKアナウンサーの河西三省さんの「前畑がんばれ」のアナウンスは、あまりにも有名な語り種である。

一九三六年(昭和十一年)八月十一日のベルリンオリンピックでの、水泳女子二百メートル平泳ぎで、前畑秀子選手が日本人女性として、初めての金メダルに輝いた日で、今年で七十一年目になる。

暇な人もいるものでこのことを数えた人がいて、河西アナの「がんばれ」は三十六回、「前畑勝った、勝った」は十五回に及んだという。

子供ごころにラジオより流れた「前畑勝った、勝った」あの興奮は今でも心に残る想い出の一頁でもある。

放送された当座は、NHKの先輩アナウンサーには、厳しい採点を下す人もいたそう、勝った、勝った、それで、

ばかりでタイムを伝えるのさえ忘れていた」と批判。河西さんは実況中、興奮のあまり机の上に立ち上がり、頼みのストツプ・ウォッチを踏みつぶしていたとのこと。

数々のこぼれ話に彩られたベルリン五輪の熱狂は、日没前の美しい夕映えでもあつたことでしょう。やがて日中戦争がはじまり、四年後に予定されていた東京大会は返上、血なまぐさい闇が時代を覆つていったのである。

北京五輪のあと東京大会を実現させたい人、また、それを阻止しようとする人、人それぞれである。

人々が手に汗を握つた「前畑がんばれ」の記憶はいま、二つの原爆忌と終戦記念日に挟まれて、ただ暦のなかに微かに置かれてはいるのみである。スポーツに心を躍らせることができる、平和のありがたさを語り伝えるかのように。

(千成 宮本定雄)

8月の黒板

『なかま』原稿募集のお知らせ

『なかま』の2・3面は、市内の皆様の投稿によって作られています。原稿は随時募集しています。

【原稿規定】 字数 650字（13字×50行）以内。ワープロによる原稿（縦書き）でも結構です。

内容 随筆・・・日常の出来事、生活の中で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などご自由にお書きください。

『なかま』に対するご意見・ご感想などもお待ちしております。

いただいた原稿は、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただくことがあります。

問い合わせ 佐倉市立中央公民館（第2・第4月曜日は休館日です）

電話 485-1801

URL <http://www.city.sakura.lg.jp/kominkan/cyuuou/index.htm>

わくわく道

『歩きたくなる佐倉の小路』健康のためハイキングに参加したいけれど、長い距離を大勢の人達のあとに付いて行くだけで大変。帰ってから二、三日は足がさがらなくなってしまう。そういう人達にお誘え向きのウォーキングコースがあります。高齢者にも無理せずに歩け、自動車もあまり通らない安全な小路です。し

かも、美しい佐倉の里山や湧水の流れに可愛いメダカや沢ガニなどを見ついたり、道端に咲く四季折々の草花などを観賞して日頃のストレスの解消などにも役立つ5キロから十キロほどの小路です。市役所はじめ市の出先機関、公民館、図書館、各保健センター、コミセン、ミレセンなどに案内冊子が常備されていますので是非一度足を運んでみて下さい。

あがとき



六月が空梅雨だったので、これから本番の真夏の水不足が心配です。今月も多くの投稿ありがとうございます。村田様のパンの中身を丸めることに関する二つの邦訳の違いに注目された考察、興味深く拝読いたしました。本当はうどん好きな宮武様のそば談議、東京のそばに対するの思い出に共感を覚える

読者も多いことでしょう。山崎様、子供の頃お母さんに教えられたこと、今でも役立つおられるとのこと、すばらしいですね。宮本様、「前畑がんばれ」の放送の裏に、批判的な意見もあつたとか、いつの世でもいろいろあるのですね。『なかま』は読者の皆様方の投稿で成り立っています。今後共、皆様方のご理解と引続いでのご投稿をよろしくお願いたします。

（石崎）